

アナトリア紀行

忘れがたい素敵なお店はたくさんある。

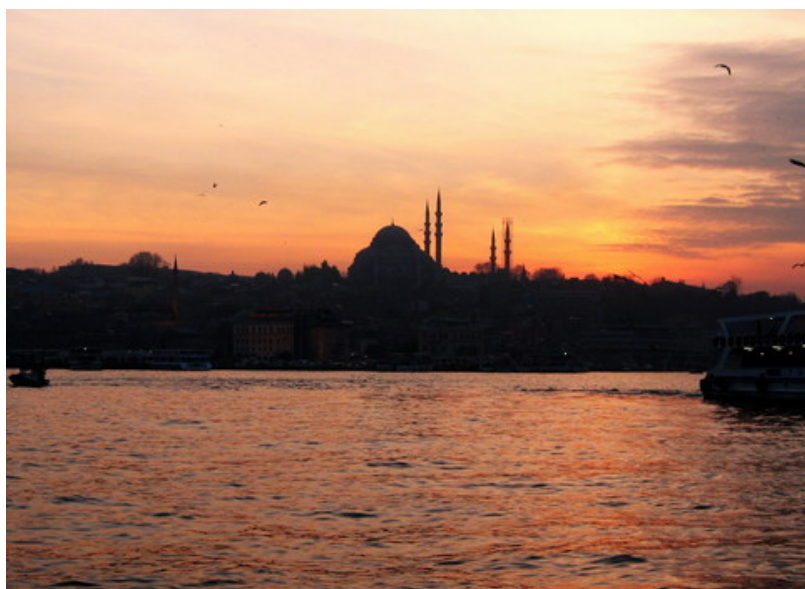
ペルーのクスコやチベットのラサは車という移動手段が発達する前の町のありようを色濃く残していて、人間の身の丈にちょうどいい。何処へ行くにも歩いていけるし、気兼ねなく入ってゆける小さな茶店や居酒屋も多い。街角には子供が遊んでいるし、老人達がゆったりとくつろいでいる。

インドのヴァーラーナシーやモロッコのマラケッシュもいい。聖なる町なのだが、汚濁と喧騒にまみれた街でもある。マラケッシュの中心はアラビア語で死人の集会所を意味するジャマエルフナと呼ばれる広場だ。

ヴァーラーナシーの中心はガンジス川沿いの沐浴場と火葬場である。ど

ちらも生と死、極楽と地獄が親しく隣り合っていて、輪廻転生を実感できる。

イスタンブールも好きな町だ。ガラタ橋から見る夕日はいつも愁いに沈んでいるように赤い。二千年に渡るビザンチン帝国やオスマン・トルコ



帝国の興亡の歴史が、橋にたたずぶものを、滅び去ったものたちへの感傷に誘うのだろう。

イスタンブール最後の日は、ブルームスクもトプカク宮殿もグランドバザールも避けて、「ロッティの茶店」で日がな一日、眼下に広がる街並みや金角湾を眺めながら過ごした。フランスの作家、ピエール・ロッティがよく立ち寄り、小説を書いたことから、いつしか「ロッティの茶店」と呼ばれるようになったこのチャハイネは、コンスタンティノープルが陥落してから六年後に建てられたユエツプ・スルタン・モスクの隣にひっそりとある。

私はイスタンブールに来るたびに、このチャハイネでゆっくりとビールを飲む。坂と丘が多いイスタンブールの街でも、この高台から眺める景色が一番好きだ。街のざわめきが肌に伝わってくるし、金角湾やその向こうのボスフォラス海峡まで一望の下に見渡せる。



アナトリアの大地を約二週間に渡って彷徨ってきた。北を黒海山脈、南をトロス山脈にさえぎられた雨季前のアナトリア高原は、からからに乾燥していた。ゆるやかに起伏する大地はただ一面の褐色で、強烈な太陽が容赦なく降り注いでいた。時には砂に足をとられ時には枯れたイラクサに肌を刺され、土ぼこりにまみれてヒットایتやビザンチンの遺跡を見て回った。

アナトリアは最古の文明の発祥地であるメソポタミアと古代ギリシヤ文明が生まれたバルカン半島を結

ぶ架け橋になった。シルクロードの終着点であり、ヨーロッパの東の玄関口でもあった。この地理的重要性から世界史上、アナトリアほどさまざまな民族の争奪の的になった土地は他にはないだろう。歴史家によればこの四千年間にアナトリアに押し寄せた民族は三十余に達し、「支配者」になったものだけでも、ヒットایت、アッシリア、ギリシャ、ローマ、モンゴル、トルコなど枚挙にいとまがない。

そして征服者達は、その美意識のまま数多くの文化を残していった。最古の鉄器民族ヒットایتの奇妙な鉄製祭器、ギリシャの彫像や円形劇場、ローマの神殿、ビザンチンの教会、トルコのモスクなどこれほど多種多様な文化遺産に恵まれた土地は他にはないだろう。もちろんその中には、神話や伝説、宗教や思想、牧畜や農耕の技術などといった無形なものも挙げられるべきだろう。

歴史の坩堝ともいべきこのアナ

トリアの大地を、私は滅び去ったものたちに憑かれたように見て回った。民族の興亡という歴史ドラマは日本の歴史にはない。キリスト教とイスラム教の何世紀にも渡る攻防は今も続いているが、激しい宗教対立なぞ



というものも日本人は経験したことがない。

そして何よりもみずみずしい山河にいつも囲まれて暮らしているわれわれには、唇が割れて血が噴き出すような乾燥の中の暮らしは想像できない。

この地球には多様な人たちが多様な暮らしを営んでいる。太陽を拝む民族がいれば、月に祈る民族もいる。人類は皆兄弟ではない。多様な思考方法、生きざまを持った「他人」で構成されている。安易に分かったと思うと、誤解が生まれやすい。だから理解するためには、根気よくその土地に、その人たちに触れてみるしかない。旅はそのためにある。

一つだけ例を挙げよう。畑に散乱する大きな石を見て、私はなんと怠惰な百姓どもだと思った。父の耕す畑には小石ひとつなかったぞと。

それは、夜に冷やされた空気中の水分が石に当たり凝結することを

利用して、わずかでも水分を土に取り込む工夫だと聞いた時には、乾燥に生きる百姓の知恵にほとほと感心した。朝方、畑の石をめくってみたが、たしかにその下は他より湿っぽかった。



もう少しで干物にでもなりそうなくらい乾ききってイスタンブールへ戻ってきた。そして昨夜はオリエントハウスという有名なショーレストランでベリータダンスを見た。

たまたま踊り子に指名されて舞台に引き上げられ、ハーレムのスルタン（皇帝）役をする羽目になったのだが、日本の浴衣姿のスルタンは酔いも手伝って、踊り子にきわめて協力的な態度をとったため大いに受けたようだ。踊りが終わったときに、日本から持参した扇子を私は踊り子にプレゼントした。

客席に戻った私を黒服のボーイがすぐに呼びに来た。踊り子が舞台裏まで来て欲しいと言っていると耳元で告げると、私の先に立った。踊り子はまだ舞台の上の姿のままだった。彼女は私のショーへの協力をねぎらい、目の前に拳を突き出した。その拳をゆっくりと開くと、てのひらに小さなガラス細工が光っていた。



「東洋のすばらしいファンをありがとう。小さなものだけどベネチアのガラスの馬をもらってください。幸せを運んでくるといわれています。東と西の交換をしましょう」

激しい踊りの後で、まだ息使いも荒く、額には汗を滴らせた彼女は、私のでのひらにガラスの馬を滑り込ませると、身を翻すように舞台裏の暗い通路へ戻っていった。

褐色の肌、黒い髪、深くくぼんだ青い眼。そのとき私は踊り子の表情に、イスタンブール二千年の歴史を見たと思った。どんな歴史書よりも、

東と西の交流を如実に描き出していた。旅の醍醐味はここにある。

ボスフォラス海峡の上にかかる月を眺めながらホテルまで歩いた。イスタンブールに着いたときはトルコの国旗にあるような細い月だったのだが、旅の終りの月は満月のように大きく明るかった。

fujizakura